

第170回 日商簿記 ズバリ！1級的中 完全予想模試 正誤表(2025年3月15日 刊行)

弊社の書籍をご利用いただき、有難うございます。
上記の書籍について、以下の通り、誤りが判明致しました。
ご迷惑をおかけして申し訳ございませんが訂正のうえ、ご利用ください。
なお、弊社HP【「ネットスクール」検索→「読者の方へ」】にて訂正資料等の最新情報を閲覧・ダウンロードできますので、ご利用下さいますようお願いいたします。

2025/5/7				
予 想	該当箇所	誤	正	備 考
問題文 第1予想 会計学 第3問	設問の文章	差し替え版につきましては、次のページをご覧ください。		2025/4/7
問題文 ウラ予想 商業簿記	決算整理事項等 8.	T社の損益計算書(本支店合併損益計算書)における当期純利益 200,000千円であった。	T社の損益計算書(本支店合併損益計算書)における当期純利益 290,000千円 であった。	2025/5/2
問題文 ウラ予想 原価計算 第1問	問2 2行目	～比較しうる資料を集めたところ、[資料]3. のとおりであった。	～比較しうる資料を集めたところ、[資料] 4. のとおりであった。	2025/5/7
解説 P.31 原価計算第1予想	製品Q ボックス図 左下	販売構成割合 総販売数量	市場占拠率 市場総需要量	2025/5/7

第1予想 会計学 第3問の問題につきまして
本書の第1予想 会計学 第3問の問題文にきまして、設問の文章が抜けておりました。
読者の方にご迷惑をおかけいたしましたことを、改めてお詫び申し上げます。
大変お手数をおかけいたしますが、次のページにございます設問の文章を追加しました差し替え版をご利用いただきますようお願いいたします。

【差し換え版】

第3問

D社は、X29年4月1日にE社を事業譲受により取得し、E社の超過収益力にあたるのれんを4,500千円計上した。D社は、のれんについて、発生年度より5年で定額法により償却している。なお、D社の当期の会計期間は、X30年4月1日からX31年3月31日である。ここで、上記のれんに関連する次の【資料】に基づいて、以下の設問(1)、(2)及び(3)に答えなさい。なお、資料及び問題文から判明すること以外は考慮する必要はない。

【資料】

- 1 D社が事業譲受により取得したE社の事業は、内部管理上独立した業績報告が行われている甲事業と乙事業から成り立っていた。なお、のれんが当初認識された時点において、甲事業の時価は15,300千円、乙事業の時価は10,200千円であった。
- 2 D社は、事業譲受により生じたのれんについて、被合併会社における事業別の時価に基づき、それぞれの事業に按分している。なお、当該時価は、のれんが当初認識された時点のものとし、当該時価に基づく按分比率は、当期まで変化しないものとする。また、被合併会社における事業区分、及び当該事業区分ごとの事業内容については、当期末まで変更はなかった。
- 3 当期末において、甲事業について減損の兆候があるため、減損会計を適用することとした。なお、減損損失の測定は、のれんを含むより大きな単位で行うこととする。
- 4 甲事業は、資産グループA、資産グループB及び資産グループCの3つのグループから成り立っている。
- 5 当期末の甲事業における資産グループA、資産グループB及び資産グループCの帳簿価額は、それぞれ5,400千円、5,290千円及び1,550千円である。
- 6 当期末の甲事業における資産グループA、資産グループB及び資産グループCには、それぞれ減損の兆候があり、また当期末における割引前将来キャッシュ・フローは、それぞれ5,312千円、5,265千円及び1,950千円である。
- 7 当期末の甲事業における資産グループA、資産グループB及び資産グループCの時価は、それぞれ3,940千円、4,318千円及び1,600千円であり、処分費用見込額は、それぞれ340千円、218千円及び110千円である。
- 8 当期末の甲事業における資産グループA、資産グループB及び資産グループCの使用価値は、それぞれ3,060千円、4,120千円及び1,650千円である。

設問

- (1) 上記【資料】に関連して、当期末における、①資産グループA、②資産グループB及び③資産グループCごとの減損損失の金額を、それぞれ解答欄に示しなさい。なお、減損損失がない場合には、解答欄に「－」と記載すること。
- (2) 上記【資料】に関連して、当期末における甲事業全体としての、のれんを含むより大きな単位における減損損失の金額を、解答欄に示しなさい。
- (3) 当期末において、D社の貸借対照表に計上されるのれんの金額を、解答欄に示しなさい。